学校保健の現場から

鎌ケ谷市教育委員会への提言と要望

小中学校におけるトランスジェンダーについて

青い鳥こどもクリニック　引田　満

LGBT あるいは LGBTQ の中の一つ

身体と心の性の不一致をトランスジェンダーと呼ぶ

日本語では性同一性障害、性別違和、性別不合など類似呼称が複数ある。

性別を分類する因子

- 身体の性：外性器（出生時に性別を割り振っている）
- 生物学的性：性染色体（XX , XY ）　※その他 XO , XYY , XXXY など
- 心の性：脳の性分化

Transgender

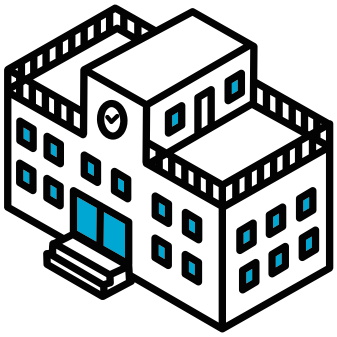
当院に通院していた市内小学６年生女児の場合

頭髪は常に極端なショートカットで、上下黒の衣服とキャップ（野球帽）で来院する。長い頭髪と暖色系の服装は一度も見たことがなく、本人の意志であろうと感じていた。公立高校に進学するにあたり母親からカミングアウト。本人は女子制服（スカートなど）を強く拒否しているという。制服は強制なのか？ 診断書なんて必要？ 県教委と掛け合う等、母はとても冷静であったが、強い決意を滲ませていた。

※私自身が知識認識不足で十分なアドバイスができず、反省すべきケースでした

＃１　トランスジェンダーの９割が小学生、中学生の時に性別にたいする違和感を持ち始めるという。二次性徴の発来も大きな転換期となりうる。親に「性別の違和感」を言葉で訴えることは年齢的に難しいので、男の子らしいあるいは女の子らしい頭髪や服装の拒否が始まる。中学生では制服の強制、男女に分かれた授業、トイレ・更衣室・宿泊学習など、ストレスを感じることが多くなり、これが二次的な問題行動や抑うつを引き起こし、症状として顕在化してくることがある。小児においてはこのような続発症が原疾患発見の端緒となるこ

とも多い。大学生や社会人になると、大きな違和感とストレスを抱えつつも自分自身と周囲に折り合いをつけながら生きていくことを選択する場合もあるが、一般的にはホルモン療法、性適合手術（性転換手術）、名前の変更、戸籍の性別変更などを目指すことが多い。これらを実現する段階において、日本では性同一性障害の病名（ジェンダークリニック、精神神経科での診断書）が不可欠となる。障害であることを認めろと言わんばかりの風潮が日本にはまだある。



◇◇◇